令和２年９月

各　位

八戸市東京事務所長

八戸レポートの送付について

時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

「八戸レポート令和２年９月号」をお送りいたしますので、ご高覧くださいますようお願いいたします。

９月 10 日、「日比谷 OKUROJI」に、八戸都市圏交流プラザ「8base（エイトベース）」がオープンしました。

八戸圏域８市町村のご当地グルメや地酒、特産品などを取りそろえております。

また、八戸圏域の魅力に触れられる各種交流会を「8base」において定期的に開催します。

みなさま、お近くに行かれた際には、ぜひお立ち寄りください。

・住　　所　　東京都千代田区内幸町 1-7-1　日比谷 OKUROJI 内
・アクセス　　JR 新橋駅・JR 有楽町駅　徒歩６分
　　日比谷駅 A13 出口・銀座駅 C1 出口　徒歩５分
・営業時間　　11:00～22:00（定休日：年末年始）
・ホームページ　　8base　https://8base.jp/
　　日比谷 OKUROJI　https://www.jrtk.jp/hibiya-okuroji/

◎皆様へのお願い

職業、役職、住所などに変更がある場合は、八戸市東京事務所までお知らせくださいますようお願い申し上げます。

八戸市東京事務所
〒102-0093 東京都千代田区平河町 2-4-2 全国都市会館５階
電話（03）3261-8973　／　FAX（03）3239-6723
E-mail: tokyo@city.hachinohe.aomori.jp

八戸レポート 9月号

令和2年8月の八戸市内での出来事や
八戸市に関連する情報をお届けします。

【行政】

記事	概要
（1）	八戸市新美術館の開館時期　来秋にずれ込む可能性
（2）	蕪島物産販売施設「かぶーにゃ」 来館者数10万人を突破
（3）	八戸市が移住促進策に力　オンライン相談窓口開設
（4）	八戸市営バス　平日4便増便し通勤・通学の混雑回避へ
（5）	八戸市民病院緩和ケア病棟　供用開始
（6）	都内に八戸圏域の情報発信拠点 「8base（エイトベース）」オープン

【産業】

記事	概要
（7）	三八地方タクシー　買い物代行などの社会実験実施
（8）	「三島サイダー」味のシャーベット新発売
（9）	マチニワで「南部せんべいマルシェ」開催
（１０）	2019年度青森県新規就農者数　292人で過去2番目の多さ

【地域】

記事	概要
（１１）	八戸東高生の「リカちゃん」 創立120周年記念の限定販売
（１２）	青森労災病院　がん診療センター新設へ
（１３）	大須賀海岸に"幸運"のマグロ出現
（１４）	八戸花火大会　～大輪 コロナ禍に負けず～
（１５）	「猫町」出版の写真家・土井さん（徳島県出身）　夫婦で八戸に移住
（１６）	種差小で海洋環境保全教室　～ごみ拾い 海を守れ！～

【文化・スポーツ】

記事	概要
（１７）	八戸三社大祭　コロナ禍の300年目　祭礼行事を実施
（１８）	是川遺跡発掘100周年記念プロジェクト　～縄文アート壁面に描こう～
（１９）	2025年青森県開催予定国民スポーツ大会　完全大会条件に延期容認へ

【行政】

記事	概要
（1）	**八戸市新美術館の開館時期　来秋にずれ込む可能性** 八戸市が2021年夏ごろのオープンを目指して市庁前に整備を進めている新美術館について、市は、開館時期が同年秋にずれ込む可能性があることを明らかにした。敷地内の地中から英語表記の古い道路標識や建物の基礎部分などの埋設物が大量に見つかり、工期が当初計画より3カ月遅れることや、新型コロナウイルスの影響で開館イベントの準備が停滞していることが主な要因。市はオープンが秋にずれ込む場合、市民の利用促進に向けて夏にプレイベントを行う考えである。
（2）	**蕪島物産販売施設「かぶーにゃ」 来館者数10万人を突破** 今年5月にオープンした蕪島物産販売施設「かぶーにゃ」の来館者が8月23日、10万人を突破した。かぶーにゃは蕪島近くに位置し、青森県内の土産品や軽食などを販売する観光拠点。八戸市によると、平日の来館者は600人ほどだが、好天の休日には2千人近くが訪れる。地元客をはじめ、津軽地方や北東北各地からの観光客も多く、最高で約2500人が来た日もあったという。三沢市から来たという節目の来館者には、施設を運営する「鮫蕪島物産販売合同会社」の代表から記念品が贈られた。
（3）	**八戸市が移住促進策に力　オンライン相談窓口開設** 新型コロナウイルスの感染拡大による地方移住への関心の高まりを受け、八戸市は移住促進施策を強化している。感染予防のため対面で相談を受けるのが難しくなっている現状を踏まえ、8月3日には、ビデオ会議サービスを活用した移住に関するオンライン相談窓口を開設し、支援体制を充実させた。予約制だが、利便性を考慮し、平日は午後9時半まで対応。自然を身近に感じながら、過ごしやすい生活環境が整っていることなどをアピールしている。
（4）	**八戸市営バス　平日4便増便し通勤・通学の混雑回避へ** 八戸市交通部は、9月1日から、新型コロナウイルス感染症対策として、通勤や通学などで乗車率が高い市営バスの関連ダイヤ計4便をそれぞれ1便ずつ増便した。既に運行している時間帯に「続行便」としてバスを1台追加。朝夕の「八戸ニュータウン・高専線」などで平日のみ増便し、車内の「3密」を回避して利用客の安全確保を図る。増便は利用や感染の状況を見ながら当面の間、継続する予定。
（5）	**八戸市民病院緩和ケア病棟　供用開始** 八戸市立市民病院の緩和ケア病棟が9月1日に供用を開始した。「緩和ケア」は、闘病中の精神的・身体的な苦痛や不安を取り除き、普段の生活に戻れるように、医師や看護師、薬剤師ら専門職が連携して医療的なサポートを行うケアで、同病棟では、きめ細かいケアを提供するため、20床全てを個室にし、家族が訪問した際に宿泊もできるように広いスペースを確保。ペットと触れ合える専用の部屋も用意するなど、入院中もできるだけ自分の時間を過ごせるように配慮した。八戸圏域の緩和ケアの拠点として、質の高い医療を提供するとともに、緩和ケアに対する理解向上も図っていく。

（６）	**都内に八戸圏域の情報発信拠点 「8base（エイトベース）」オープン** JR有楽町駅と新橋駅をつなぐ東京・内幸町の高架下に9月10日、八戸市が整備していた八戸都市圏交流プラザ「8base（エイトベース）」がオープンした。138平方メートルの店内では圏域の特産品を豊富に取りそろえ、飲食スペースではサバや田子牛などを使った料理を提供する。圏域ファンミーティングと題した交流会も定期開催し、移住促進につなげる場としても活用する。関係者約20人が出席した式典で小林眞市長は「レストランやアンテナショップとしてだけでなく、交流機能に重点を置いて活用したい」と抱負を述べた。営業時間は午前11時～午後10時。年末年始を除いて営業する。

【産業】

記事	概要
（７）	**三八地方タクシー　買い物代行などの社会実験実施** 新型コロナウイルスの影響で外出自粛の動きが広がっていることを受け、青森県三八地域県民局と県タクシー協会は8月10日から24日まで、タクシー運転手が買い物などの代行サービスを担う社会実験を実施した。サービス内容は、高齢者や障がい者、病人らの緊急用務の代行、交通弱者の買い物代行、医療機関からの薬の受け取り、住民票や戸籍抄本といった公的証明書類の受け取りなど。社会実験には、八戸、階上、五戸、三戸の4市町のタクシー事業者計10社が参加した。
（８）	**「三島サイダー」味のシャーベット新発売** 八戸製氷冷蔵は、三島シトロンと、みしまバナナサイダーのシロップをそれぞれ使用した2種類のシャーベットを発売した。炭酸が苦手な人でも定番の味を楽しめ、パッケージはサイダーのラベルのデザインがそのまま使われている。価格は1個250円（税込み）で、6個を詰め合わせた箱入りが1610円。八戸市内の八戸製氷冷蔵と八食センター、浜市場みなとっとで販売している。
（９）	**マチニワで「南部せんべいマルシェ」開催** 八戸商工会議所は8月30日、三日町のマチニワで「八戸の南部せんべいマルシェ」を開いた。会場にはゴマや豆などの定番商品に加え、チーズやコーヒーなどさまざまな味の煎餅がずらりと並び、多くの種類を楽しめるよう1枚ずつ包装された商品も販売。市内の高校生が考案した、みたらし風の「せんべいスイーツ」も人気を集めていた。南部せんべい発祥の地とされる八戸市の煎餅文化を広くPRし、地元での消費拡大につなげるのが大きな狙いで、昨年に続き今回が2回目の開催となった。
（１０）	**2019年度青森県新規就農者数　292人で過去2番目の多さ** 青森県が8月27日までに発表した2019年度の新規就農者数は292人に上り、2014年度の296人に次ぐ過去2番目の多さとなった。前年の野菜販売価格が好調で、農業法人の雇用が進んだことなどが要因で、野菜、果実農家への就農が多かった。担い手獲得に向け、県は今後、相談から定着まで段階的な支援に取り組むほか、国の補助制度などを紹介して農業のPRに力を入れる。

【地域】

記事	概要
（１１）	**八戸東高生の「リカちゃん」 創立120周年記念の限定販売** 青森県立八戸東高が2021年に創立120周年を迎えるのを記念し、同校同窓会松友会が、同校の制服を着たリカちゃん人形の製作を企画した。実在する学校の制服を着用した「制服オリジナルリカちゃん」シリーズは、青森、岩手両県では初となる。"身長"22センチで、夏服と冬服、ソックス、靴、新旧の校章シール付き。インターネットの特設サイトで予約を受け付け、卒業生と在校生を対象に2千体限定で販売する。価格は6800円（税込み）で、送料520円が別途必要。
（１２）	**青森労災病院　がん診療センター新設へ** 八戸市の青森労災病院が、がん治療や、療養中の就労支援などを包括的に行う「がん診療センター」を病院内に新設し、11月に運用を開始する方向で準備を進めている。同センターでは、がん診療機能の向上を図るため、消化器内科や外科、放射線治療科、歯科口腔外科など各診療科の垣根を越えて、総合的な診断に基づき治療方針を決定。加えて、栄養管理やリハビリテーション、薬剤、緩和ケアなどそれぞれの部門の専門職も連携して、チーム一体となってがん患者の治療と療養中の就労支援に当たっていく。
（１３）	**大須賀海岸に"幸運"のマグロ出現** 八戸市の大須賀海岸に8月22日、体長210センチのマグロが打ち上げられた。発見したのは結婚写真の撮影のため同海岸を訪れていた、6月に結婚したばかりの夫妻と、撮影を担当した友人2人。マグロは最初、浅瀬にいたが、程なくして動かなくなったという。新型コロナウイルスの影響で、式場での披露宴を断念していた2人に、思わぬ"黒いダイヤ"のプレゼントとなった。
（１４）	**八戸花火大会　～大輪 コロナ禍に負けず～** 新型コロナウイルスの影響でさまざまなイベントの中止が相次ぐ中、夏の風物詩・八戸花火大会が8月23日夜、館鼻岸壁で開かれた。今年のテーマは「まちを照らせ！希望の大輪」。大玉を中心に色とりどりの花火が打ち上げられ、悪疫退散のご利益があるとされる妖怪「アマビエ」をモチーフにした花火も登場。医療従事者へのエールを送る青色の花火も上がり、会場では大きな拍手が湧き上がった。40周年の節目を迎えた夏の風物詩はコロナ禍に負けず、今年も市民を魅了し、港町・八戸に元気と活力を発信した。
（１５）	**「猫町」出版の写真家・土井さん（徳島県出身）　夫婦で八戸に移住** 外国の街並みや海辺の風景、地域住民と共存する「地域猫」の様子を捉えた写真集を出版してきた土井九郎さん（徳島県出身）が、八戸市出身の妻奈穂子さんと共に、8月初旬に徳島県から八戸市に移住し、同市に活動拠点を移した。2011年にJR鮫駅で偶然見掛けたワンコインバスで初めて種差海岸に降り立った際、気付けば何万枚も写真を撮っていたという。これまでに撮りためた八戸の写真は、転居前を含めると数万枚に上る。「種差海岸は特別な場所。そのうち八戸の写真集を出せれば」と九郎さんは話している。

（１６）	**種差小で海洋環境保全教室　～ごみ拾い 海を守れ！～** 八戸市立種差小で8月26日、海洋環境保全教室が行われ、3年生以上の児童9人が海の環境を守る大切さについて理解を深めた。同校が取り組む総合学習の一環で、今回初めて八戸海上保安部が全面協力した。教室では、同保安部の職員がスライドショーで生活排水が海水汚染に与える影響や、海保の仕事内容などについて説明した。その後、6年生2人が種差海岸で清掃活動を実施し、ペットボトルや発泡スチロールなどを拾い集めた。2人は、回収したごみの種類や量などを調査して今後の海洋保全活動に生かす予定。

【文化・スポーツ】

記事	概要
（１７）	**八戸三社大祭　コロナ禍の300年目　祭礼行事を実施** 発祥から300年目を迎えた八戸三社大祭は8月1日、神社での祭礼行事が行われた。新型コロナウイルスの影響で神輿や山車の合同運行が中止になったことを受け、神明宮では神輿渡御休止奉告祭が執り行われた。8月2日には、三社大祭発祥の霾神社と長者山新羅神社で神事の例祭がそれぞれ執り行われた。出席した関係者らは、先人が築き上げてきた歴史の重みや祭りの精神に思いをはせ、世界中でまん延する新型コロナウイルスの終息、八戸地域全体の安寧や発展に祈りをささげた。
（１８）	**是川遺跡発掘100周年記念プロジェクト　～縄文アート壁面に描こう～** 八戸市の是川遺跡の発掘100周年を記念し、是川団地町内連合会は「是川縄文アートプロジェクト2020」を展開している。是川団地内の是川中央公園にある壁面に縄文をモチーフにしたアートを描くもので、高齢化が進む同団地の活性化につなげたい考え。募集して集まったアートの原画を基に、八戸学院大短期大学部准教授の佐貫巧さんが図案を制作し、10月10、11日に市民参加型のペイントワークショップを開く予定。完成とお披露目会は11月3日を見込んでいる。
（１９）	**2025年青森県開催予定国民スポーツ大会　完全大会条件に延期容認へ** 2025年に青森県で開催予定の第80回国民スポーツ大会（現・国民体育大会）について、1年延期案を提示した日本スポーツ協会に対し、県は冬季競技も含めた2026年の完全国体実施を条件に受け入れる方針を示した。冬季大会氷上競技の主会場となる八戸市の競技団体関係者は選手強化への影響を危惧しつつも、県の判断を尊重する考えを示した。今後、日本スポ協がほかの開催予定県の意見などを踏まえて延期を最終決定するという。